様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１８３２７

研究課題名（和文）放送番組アーカイブの日欧米比較――戦争資料映像の構成と国際展開を基軸として

研究課題名（英文）Comparison of Television Archives in Japan, Europe, and the United States--Based on the Composition and International Development of War Documentary Footage

研究代表者
辻　泰明（Tsuji, Yasuaki）

筑波大学・図書館情報メディア系・客員研究員

研究者番号：３０７６７４２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦争資料映像の構成と国際展開を基軸として、日欧米の放送番組アーカイブを調査し、分析と考察の結果、以下のような観点についての知見を得た。
(1)日欧米における放送番組アーカイブの成立時期および生成の経緯、(2)放送番組アーカイブにおけるテレビ番組収蔵の特殊性についての日欧米の状況、(3)記録保存メディアの進化と放送番組アーカイブの発展過程における日欧米の比較、(4)番組保存に関する気運とアーカイブ構築の本格化における日欧米の差異、(5)欧米と比較した上での日本における放送番組アーカイブの課題。
これらの成果は、計3件の雑誌論文、計2件の学会発表、計4件の図書に発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来、海外に存在する放送番組アーカイブについての研究は、いずれも概説と現状報告に留まっており、具体的な資料の編成と展開に基づいて、日本のアーカイブと国際比較をする研究は行われていなかった。
本研究は、この空白を埋め、日欧米の各アーカイブにおける戦争映像資料の構成と展開を比較分析することにより、放送コンテンツの国際展開に資する放送番組アーカイブ研究の基盤を構築した。
また、放送番組アーカイブが所蔵する映像資料の活用について、文化的・歴史的観点からの社会的意義を示した。

研究成果の概要（英文）：　Based on the composition and international development of war footage, this study examined Japanese, European, and the U.S. television archives, and as a result of analysis and discussion, the following findings were obtained.
(1) The establishment of television archive in Japan, Europe, and the U.S. and the history of their creation, (2) The situation in Japan, Europe, and the U.S. regarding the special characteristics of TV program storage in television archive compared to film archive, (3) A comparison of the evolution of recording preservation media and the development process of television archive, (4) The difference between Japan, Europe, and the U.S. in the momentum toward program preservation and the full-scale construction of archive, (5) Issues for television archive in Japan in comparison to those in Europe and the U.S.A.
These results were published in a total of three journal articles, two conference presentations, and four books.

研究分野：人文社会情報学

キーワード：映像アーカイブ　放送番組　国際展開　戦争映像　インターネット動画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

日本における放送番組アーカイブは埼玉県の川口アーカイブ（NHK アーカイブスの施設）がある。所蔵するコンテンツは主に公共放送のものではあるが、24 時間同時収録を行っており、日本では唯一の本格的な放送番組アーカイブといえる。一方、ヨーロッパではフランスの INA（国立視聴覚研究所）、アメリカでは NAVCC（国立視聴覚資料保存センター）が、公共的な放送番組アーカイブとして、大規模なアーカイブ連携やインターネットによる海外発信を行い、日本に先行している。

欧米における放送コンテンツ国際展開の重要な柱となっているのが、第二次世界大戦前後すなわち 1930 年代から 50 年代にかけての記録映像である。強制収容、ホロコースト、原爆などの惨禍を映像によって克明に記録したことは人類にとって初めての経験であり、それらの映像は、一方で戦争の記憶が風化し、一方で国際紛争と核兵器による威嚇が激化している現在、改めて見つめ直すべき貴重な資産である。そして、それらの映像を活用して制作された番組は、欧米における放送コンテンツ国際展開の基軸であるといえる。

研究開始当初、このような国際展開を行う欧米の放送番組アーカイブについては、施設の概要と現状を記した報告が幾つか発表されているのみだった。また、国際比較による研究についても、文書館を中心とするアーカイブ一般についての研究はあったが、放送番組アーカイブを具体的な資料の編成と展開に基づいて分析し、国際比較を行う研究は現れていなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、第二次世界大戦前後の時期における戦争に関する映像資料の構成と展開を基軸として、日欧米の公共的放送番組アーカイブを調査し、これまで行われていなかった国際比較の観点にたって、それぞれの特性を解明することである。

３．研究の方法

本研究は、これまで文書館の研究で行われてきた国際比較の方法を放送番組アーカイブに適用した。

比較にあたっては、日欧米それぞれの地域を代表する放送番組アーカイブに対し、第二次世界大戦を挟む 1930 年代から 1950 年代にかけての戦争映像資料に関するコンテンツの構成と展開を基軸とした。

各アーカイブにおける、戦争映像資料の構成、編成記述、メタデータ付与の実態を調査した。また、これまでどのような資料がどの程度、どのような番組に使われてきたのかを調査し、そこから読み取れる戦争映像資料の使途と役割はどのようなものかを分析した。そして、そこに反映されていると想定される展開への方針と歴史観を考察した。

４．研究成果

<2018 年度>

まず、準備段階での調査結果から、日欧米各国の公共的放送番組アーカイブの全体像分析を補完するものとしての事例研究について、その対象となるコンテンツの的確な選定を行うことにより、当初計画よりも調査研究を効率的に実施可能であるとの知見を得た。この知見の上に立ち、2018 年度は、海外アーカイブに関しては、アメリカの放送番組・映像資料アーカイブ(NAVCC)において調査および担当者（アーキビスト）へのヒアリングと意見交換を実施した。同時に、放送番組アーカイブと放送局の関係および放送番組への展開の実態についての調査を実施し、第二次世界大戦期の映像資料を活用した放送番組を定期的に制作している放送局（RM.PBS）を訪問して、放送局内における映像資料の収蔵体制、制作体制についての実地調査を行った。また、当該放送局において、アーカイブからの資料映像を活用する際の制作フロー、制作意図とコンテンツの関係性などにつき、番組制作者（エグゼクティブ・プロデューサー）へのインタビューを実施した。

さらに、予備調査および実地調査の結果を踏まえて、事例分析としてとりあげるコンテンツの選定も開始した。また、これらの調査の過程で明確になった、日本の公共的放送番組アーカイブ（NHK アーカイブス）が収蔵する第二次世界大戦期資料についての分析を、2018 年度に発行した図書（『昭和期放送メディア論』）の一部に反映させた。

<2019 年度>

海外アーカイブに関しては、ヨーロッパを代表する放送番組アーカイブであるフランス国立視聴覚研究所 L'Institut National de l'Audiovisuel において訪問調査およびインタビューを実施し、戦争映像の構成および展開について多くの知見を得た。また、そのオンライン・データベースを提供するイナテーク Inathèque（フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de Francee フランソワ・ミッテラン館 Bibliotheque Francois-Mitterrand 内）において、訪問調査およびインタビューを実施し、データベースにおけるコンテンツ収蔵の構造と戦争映像コンテンツ展開に関するデータを収集した。

さらに、実地調査の結果を踏まえて、日欧米の公共的放送番組アーカイブをコンテンツ展開の観点から比較する分析にも着手した。
また、これらの調査および分析の過程で明らかになった、インターネット動画メディアにおける映像コンテンツ展開の実相を、2019 年度に発行した図書『インターネット動画メディア論　――映像コミュニケーション革命の現状分析――』に反映させた。

<2020 年度>
これまでの訪問調査およびインタビューの結果およびデータベースにおけるコンテンツ収蔵の構造と戦争映像コンテンツ展開に関するデータの調査結果を整理し、日欧米各国の公共的放送番組アーカイブの比較分析を行う環境を整えた。
その上で、日欧米の公共的放送番組アーカイブをコンテンツ展開の観点から比較する分析を進めた。
その結果、欧米には、日本には存在しない専門職映像アーキビストが存在し、インターネット配信を主とする次世代メディア環境下での映像資料の組織化と国際展開にあたって中核的な機能を果たしているという知見を得た。
これらの調査および分析の過程で明らかになった結果を学術的にまとめ、その一部を、2020 年度に発行した図書『映像アーカイブ論　――記録と記憶が照射する未来――』に反映させた。

<2021 年度>
これまでの訪問調査やインタビューの結果およびデータベースにおけるコンテンツ収蔵の構造と戦争映像コンテンツ展開に関するデータの整理結果を参照し、日欧米各国の公共的放送番組アーカイブの比較分析を継続した。
また、日欧米の公共的放送番組アーカイブをコンテンツ展開の観点からも比較しつつ、考察を進めた。
その結果得られた知見の一部を、2021 年度に発行した図書『平成期放送メディア論　――テレビからインターネットへの転換はどのように進んだのか』および学術論文『動画の特性と社会』に反映させた。

<2022 年度>
前年度に引き続き、アメリカの放送番組アーカイブ、フランスの放送番組アーカイブにおける調査結果に基づいて考察を行った。
考察にあたっては、訪問調査やインタビューの結果およびデータベースにおけるコンテンツ収蔵の構造と戦争映像コンテンツ展開に関するデータの整理結果を参照し、日欧米各国の公共的放送番組アーカイブの比較分析を行った。また、日欧米の公共的放送番組アーカイブをコンテンツ展開の観点からも比較し、考察を進めた。
これらの知見について、調査および分析の結果を交えつつ、2022 年 7 月と 2023 年 3 月に、学会研究会で発表した。

<2023 年度>
前年度に引き続き、アメリカの放送番組アーカイブ、フランスの放送番組アーカイブにおける調査結果に基づいて考察を行った。
本研究によって得た知見に基づき、特にアメリカとカナダの日系人強制収容に関するアーカイブ映像を比較分析し、2023 年 11 月に論文 Comparative Analysis between the Japanese American and the Japanese Canadian Internment Documentaries.を発表した。

<本研究によって得た主な知見>
(1)日欧米における放送番組アーカイブの成立時期および生成の経緯
ヨーロッパおよびアメリカでは、日本より 10 年ほど先行してテレビ番組の保存が始まったが、いずれも放送局あるいは図書館といった公共的機関による保存だった。このことは映画のフィルムアーカイブがフランスでは民間から始まるなど個人の熱意によって創始されたこととは異なる点でも日欧米に共通している。
(2)放送アーカイブにおけるテレビ番組収蔵の特殊性についての日欧米の状況
草創期の放送番組アーカイブにおけるテレビ番組の保存に関しては、日欧米とも、ほとんどがフィルム素材の番組であり、テレビメディアの特性である同時性を持つ番組群すなわちスタジオからの生放送や外部からの中継放送は保存されることが少なかった。日本は、放送に関しては 20 年ほど、資料保存に関しては 10 年ほど、欧米よりも遅れたとはいえ、保存された番組がフィルム素材であること、一部しか保存されなかったことなどの点で、欧米との懸隔は、さほど生じていなかったと考えられる。
(3)記録保存メディアの進化と放送アーカイブの発展過程における日欧米の比較
当初、テレビ番組は映画フィルムによって撮影されて保存されることがほとんどであったが、ビデオテープが開発され、録画が行われるようになっても、テープが高額であるため、消去された点は、日欧米とも共通していた。しかし、欧米では 1960 年代初頭から 1970 年代半ばにかけて、公共的機関が本格的な保存を開始したのに対し、日本ではビデオテープが低廉化する 1980

年代まで、大規模な録画保存は行われなかった。このことには、番組保存に対する公共性と経済性についての意識の相違が反映されていると考えられる。

(4)番組保存に関する気運とアーカイブ構築の本格化における日欧米の差異

1980 年代から映像資料を活用した番組の制作が国際的に活発になり、日欧米共に番組保存の機運が高まった。1990 年代以降、欧米では法制度が整備され、社会的にテレビ番組保存の位置づけが明確化されたのに対し、日本では、川口に本格的なアーカイブが誕生したものの主として経済的効用が注目にされるに留まった。

(5)欧米と比較した上での日本における放送アーカイブの課題

日本における代表的な放送番組アーカイブである NHK アーカイブスは保存番組数量など規模の点では、欧米のアーカイブに匹敵するが、公共放送の番組のみが対象であり、欧米のような組織横断的な収集と保存は行われていない。このことには、テレビ番組という文化遺産の保存に関して経済性だけではない公共性に関する議論が成熟していないという事情が伏在すると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 辻　泰明	４．巻 72(2)
２．論文標題 動画の特性と社会	５．発行年 2022年
３．雑誌名 情報の科学と技術	６．最初と最後の頁 38-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18919/jkg.72.2_38	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻 泰明	４．巻 40(6)
２．論文標題 SNS動画戦争の衝撃とマスメディアの存在意義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 New media / ニューメディア	６．最初と最後の頁 14-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yasuaki Tsuji	４．巻 16(1)
２．論文標題 Comparative Analysis between the Japanese American and the Japanese Canadian Internment Documentaries	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Journal of Socio-Informatics	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14836/jsi.16.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 辻　泰明
２．発表標題 日本におけるテレビ番組アーカイブの特性と課題
３．学会等名 日本映像学会第3回映像アーカイブ研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 辻　泰明
２．発表標題 日本におけるテレビ番組アーカイブの特性と今後の課題―国際比較の観点から―
３．学会等名 デジタル映像アーカイブの未来研究会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

１．著者名 辻　泰明	４．発行年 2018年
２．出版社 和泉書院	５．総ページ数 212
３．書名 昭和期放送メディア論	

１．著者名 辻　泰明	４．発行年 2019年
２．出版社 大学教育出版	５．総ページ数 148
３．書名 インターネット動画メディア論―映像コミュニケーション革命の現状分析	

１．著者名 辻　泰明	４．発行年 2020年
２．出版社 大学教育出版	５．総ページ数 172
３．書名 映像アーカイブ論――記録と記憶が照射する未来	

１．著者名 辻　泰明	４．発行年 2022年
２．出版社 和泉書院	５．総ページ数 188
３．書名 平成期放送メディア論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関